
骸骨を吐き出す洞窟

志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

骸骨を吐き出す洞窟

【Zコード】

Z5407A

【作者名】

志信

【あらすじ】

村の外れには、武装した骸骨を吐き出す洞窟があるという。村の平和を脅かす骸骨退治を依頼された二人の女剣士の運命は。ファンタジーホラー短編。

「お願いです、剣士様のー私達の村を救ってくださいー」

旅の女剣士である私と相棒のメビウスは、小さな村の酒場で顔を見合させていた。

「お礼はいくらでもします、お願いですから、私達の村を……！」この村の長だと名乗った小太りの中年男性は、女の私達より背が低い。

床に膝をつき、両手を握り合わせて懇願してくる。私が肩をすくめると、メビウスが困ったように口を開いた。

「ええと、村長さん？ とりあえず、私達に何をして欲しいんですか？」

「引き受けてくださいのですか！？」

「まだそつと決まつたわけじゃないわよ。依頼の中身を話してみなさい」

私がそう言つと、村長は納得したように頷き、話しだした。

彼の話によると、この村の近くには古代遺跡があるのだそうだ。いつ誰が何の目的で造つたのかはわからない。だが、村にとつては迷惑な遺跡である。

何しろその遺跡は、何故か村を襲つてくる骸骨の戦士を次々と吐き出すと言う。

「それってどうこいつよ、何が原因なの？」

「わからないのです……とにかくその遺跡の入口から、次々と武装した骸骨が現れるのです」

「次々って、どのくらいの間隔ですか？」

「決まった周期はありません。記録によれば何千年も前からずっと、不定期に骸骨が出て来るのだそうです。

十年近く出て来なかつたかと思えば、三日おきに現れたことも

「ふーん……数は？ 強いの？」

「ほんと一体ずつです。多く現れたとしても、五体以上同時に現れることはなかつたと聞きます。

村を護衛して戦つてくれた戦士はさして強くないと言つております。したが、

何しろこの村にはきちんとした戦闘訓練を受けた者など一人もないものとして

「なるほど」

メビウスが腕を組んだ。私はそんな相棒の様子を見やつた後、村長に向けて人差し指と親指で輪を作る。

「で、報酬は？ それによつては、考えてやらないうこともないわよ」「ああ、それならば」

数分後、私とメビウスは宝の山の前にいた。

淡く輝く武器防具に装飾品の山。魔法の品物だらつ。街で売れば一財産を軽く築けるに違ひない。

「この村にはかつて腕のいい魔法使いがいたらしく、その者が残した魔法の品がこの村には大量にあります。

私達はこれを少しずつ売つて、収入の足しにしているのです」

「よく盗賊に持つて行かれませんでしたね」

「近寄らないのですよ、骸骨を吐き出す洞窟の噂を氣味悪がつて」

「なるほどね。じゃあ、この魔法の品は何をどうしたらもうつていの？」

「骸骨一体の首につき、一つをお譲り致します。

もしこの村が一度と骸骨に襲われないような状況にしてくださつたのなら、好きなだけお持ちいただいて結構です

「そうですか。……ねえリンネ、どう思う？」

言いながらメビウスが近寄つてきた。私も彼女に耳を寄せてやる。「戦士なら楽勝の骸骨を倒してこれだけもらえるなら、破格の報酬よね。騙されてるんじゃない？」

「何千年と前からの心配事だから困つてるとかも知れないよ？」「そつか、そう考えれば自然よね。ちょうど路銀も怪しいところだつたし……」「ん、受けよつか

私は頷いた。

翌日、愛用の鎧と剣に身を固めた私とメビウスは

村長の案内で遺跡をを目指していた。

「どうして遺跡の入口を塞がなかつたのよ」

「今の入口は三代目なのです。いくら塞いでも、連中は穴を掘つて別の場所から出て来るんですよ。

それならばいつそ入口は塞がないでおいたほうが、出て来る場所がわかつて良いかと思いまして」

「ふーん」

そんな会話をしているうちに、遺跡の入口が見えてきた。
なるほど、遺跡と言つよつは洞穴に近い。ちょっとした崖の壁面に
ぽつかりと穴が開いている。

「掘つて出て来るつていうのは間違いなそわつね」

「中はどうなつてるかわかります？」

「入つてしまは土壁の迷路のよつになつてはいるはずです。ただ、
奥のほうまではわかりかねます」

「へえ」

適当な返事をし、私はたいまつに火を灯した。

「それじゃ、行つて来ます」

「報酬、すつぽかすんじやないわよ」

「それはもう……」武運を祈つておつまます

めらめらと燃える炎が照らす暗闇を進んでいく私とメビウス。
村長の言つていた通り、中は土を掘つて作った迷路のようだ。

明らかに人工のものであった。村長が洞窟ではなく遺跡と呼んでいたのもわかる気がした。

ただ、その作りはかなり稚拙だった。曲がり角があつてもその先はすぐに行き止まりになつており、迷うことがない。

「迷路のつもりだったのかしら。ほとんど一本道じゃない」「ありがたいことだけね」

ときおりそんな会話を交わしつつ、私達はさらに奥へと進む。

一本道ではあるがその長さは半端ではなく、思つていたより広い遺跡を歩くうちに、半日は持つはずのたいまつが燃え尽きてしまつた。

仕方なく私は新しいたいまつに火を点ける。メビウスが取り出した干し肉で適当に食事を取りつつ、私達は歩いた。

「もう少し歩いたら、交代で見張りを立てて休もうか」「賛成。さすがにこれ以上は疲れるな」

かたつ。

つぶやいた私の耳に届く、奇妙な軽い音。

「……ねえ、今なにか聞こえなかつた?」

「え?」

「前のほうから……」

言いながら私が暗闇に目を凝らすと、軽い音はますます近くはっきりと聞こえてきた。何かが近付いてきている。

「……噂の骸骨かな?」

「でしようね。ここは狭いわ、私に任せて」

二人が並んで剣を振り回せるほど通路は広くなかった。たいまつをメビウスに手渡し、私は剣を抜きながら暗闇へ飛び込む。

メビウスの持つ灯かりに照らし出されたのは、紛れもなく人間の白骨死体だった。

違うのはその死体が生きているかのよつに自立し、剣を構えて襲いかかつて来ることだけだ。

「つ！」

無造作な骸骨の振り下ろした剣を受け止め、即座に反撃に転じる。隙の生じた胴体への痛烈な横薙きの一撃だ。

がきやあつ！

何があつたのかは知らないが、骨はだいぶもろくなつていたらしい。簡単に碎けた。

崩れ落ちてなお動き続ける骸骨の頭を、私は思い切り踏んづけてやつた。やはり頭蓋骨は粉々になり、そしてよつやく動きが止まる。

「やつたね！」

「楽勝楽勝。しかし、本当に骨が動いてるとほ……」

軽く拳を打ち合わせて勝利の喜びを分かち合ひ、メビウスと私はそぞれに碎けた骸骨の骨を手に取つた。

「別に変わつたところはない……かな」

「ん。魔法で動いてるのかも知れないね、詳しいことはわからないけど」

くるくると大腿骨を指先でもてあそび、私は視線を通路の奥へ移した。

「あそこから沸いて出たみたいだ」

闇に覆い隠されていった螺旋階段の入口が、揺らぐ照明の元にその姿を現した。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ……

「どこまで続いているのかしら……」

思わずそんな力ない言葉を漏らしてしまつ。

何故か腐臭の漂う螺旋階段を下り始めてもうだいぶ経つ。私などはすでに時間の感覚がなくなつていた。

足が棒になつたと例えるに相応しく、ふくらはぎがぱんぱんになつてしまつた。つま先も痛い。

ただひたすら地下深くへと伸びる下り階段はたこまつに墨染じ出されている私達の周囲を除けば真つ暗闇で、まるで人界のはるか下に存在するといつ魔界へと続いているかのような恐怖をかき立てた。

先ほどの骸骨も、魔界からこの階段を昇つてやつて来たのだろうか。

「……リンネ、もう戻らない？」

燃え付きかけていた一本目のたいまつから、二本目のたいまつへと火を移していたメビウスがやや言いにくそうに提案した。

「さつきの骸骨を持つて帰れば、それだけで魔法の品が一つも「うえる」んだから。

それを路銀にすればいいんだよ。このまま行つたら、戻れなくなるかもしれないよ？」

「そ、そうね……実は私もいつ言い出そうかと思つてた」

笑い合い、火の消えた棒切れをその場に放り捨てて回れ右をする私達。

とんでもない遺跡へ潜り込んでしまつたものだ。そんなことを思いながら、私は下ってきた階段を昇り始めた。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ……

疲れ切つた足を叱咤しつつ、のろのろと階段を昇つていぐ。しかしこいつまで昇つても入口が見当たらない。

ちらりと横目でメビウスのたいまつを見ると、すでに半分ほどが燃え尽きてしまっていた。

おかしい。いくら疲れているとはいっても、もつとったのと同じくらいは昇ったはずだ。

「ねえ、メビウス……なんかおかしいと思わない？」

「思つ……なんだかずっと昇つてないよつない……いや、昇つてないつて言うよりは……」

そこまで言いかけ、メビウスは足を止めて硬直した。何事かとその視線を追つてみると、

「……」

引き返そうと決めた場所に捨てた、一本目のたいまつの燃えかすがあつた。

「……戻ってきた？」

「嘘でしょ……昇つても無駄つてこと？」

「そうみたいね……仕方ない、下ろう」

私の提案にメビウスは嫌そうな顔をしたが、昇つても無駄ならば下るしかない。

疲れているのは私も同じだから、一緒に頑張ろうと相棒をなげさめ再び進行方向を百八十度変えて一步を踏み出す。

道中、すっかり会話はなくなってしまった。休もうといつ提案もお互いにしなかった。

休んでしまえば、一度と立ち上がりやすくなったりしたからだ。わけもなくそんな気がした。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ……

先ほどよりも歩く速度が上がっていたのは階段が下りだつたからだろうか、それとも恐怖のためだろうか。

うつむき加減で足を進めていた私は、やがてそれを見つけてしまう。それを見つけてしまったのを認めてしまったくなくて、私は一段抜

かしでそれへ近付いた。

メビウスも同じようにそれを見てしまつたらしく、動かない足を引きずるように下りてくる。

私が見つけたそれは、絶望の象徴ともいうべき代物だつた。

一本目のたいまつの燃えかすが、そこに落ちていた。

私はぺたりとその場にへたり込んだ。メビウスは立ち尽くしたままだが、表情は似たようなものだ。

驚きが絶望に変わり、絶望が生きる氣力を奪う。

もう少し下つたら、もう少し昇つたらといつ希望が、極度の疲労に握り潰されていく。

「……」

私達はどちらからともなく剣を抜いた。ふらふらと体を寄せ合ひ、震える手で切つ先を喉元に押し付け合ひ。

私を見つめるメビウスの瞳は光を失っていた。向かい合ひ私の瞳も、同じように生氣をなくしているのだろう。

「……

私がメビウスの喉を貫くと同時に、私の喉がメビウスに貫かれた。電気が走つたように硬直したのもほんのわずか、私達は折り重なつて崩れ落ちた。

こんなところで死にたくなかつた。

どうしてこんなことになつてしまつたのだろう。

自分があんな依頼を受けなければ、村長があんな依頼をしてこなければ。あんなところに村がなければ。

あの村さえなければ。あの村さえ、あの村さえなければ

現世に強い未練や恨みを残して死んだ者の屍は、その思いを遂げるべく再び動き出すという。

この遺跡で死んでいた者達も例外ではなかつた。

村人に骸骨退治を依頼されて遺跡に潜り、人の感覚を狂わせる魔法のかけられた螺旋階段に迷い込んだ戦士は

ある者は餓えに倒れ、ある者は絶望に耐え切れず自ら命を絶つ。

そして今際の際に考えるのだ。自分を死に追い込んだのは何かと。その考えはたいてい同じ所に行き着く。

自分が死んだのは、自分に骸骨退治を依頼したあの村のせいだ

恨みは死後の世界から魂を呼び戻し、生ける屍として自らの腐った体を突き動かす。

人の感覚を狂わせる魔法も死人には通じない。たっぷりと時間をかけて階段を昇り切った死体は

その頃にはほとんどの場合、腐った肉が落ちて骨だけになってしまつている。

骸骨退治の依頼を果たせず散つた戦士は、新たな骸骨となつて村を襲うのだ。

今日もまた、遺跡から骸骨が顔を出す。村への復讐を果たすべく、生前の装備に身を固め。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407a/>

骸骨を吐き出す洞窟

2010年10月21日22時15分発行